



「福澤育林友の会」ニュース

第 6 号 発行日 2004 年 6 月 20 日

福澤育林友の会

東京都港区三田 2-15-45 慶應義塾 管財部

TEL 03-5427-1532・FAX 03-5427-1533

<http://www.f-ikurin.jp>

設立 40 年を迎える (財) 福澤記念育林会

(財) 福澤記念育林会
常任理事 海瀬亀太郎

福澤育林友の会が支援する (財) 福澤記念育林会は1965年1月 (昭和40年) に設立され、まもなく40周年を迎えようとしていますので、設立された当時を振り返ってみたいと思います。慶應義塾創立100年を記念しての施設整備事業がほぼ完成の域に達した1964年 (昭和39年) に高村象平塾長が100年後に備えて学事振興、殊に少壮学者育成の重要性を鮮明にされ、「学問は一日一夜のために在るものではなく、学者は一朝一夕にして成るものではない。施設の復興充実は焦眉の急であるが学事の振興、学者の育成は義塾百年の計である。われわれは目捷の急に追われて百年の計を忘れてはならないことを痛感する。」と述べられ「福澤諭吉記念学事振興基金」を設定されました。この基金運用の一つの手段として学校林の造成を考えられ、それが同財団設立の発端になりました。

(財) 福澤記念育林会の設立に当たり、高村塾長は「義塾は百年続いてきた。これから百年、二百年続くわけだから"永遠の財産"として学校林があってもいい。いまは間に合わなくても半世紀のちの若い人たちが恩恵を得ればそれでいいじゃないか、と思ってね」と述べられていたと伝えられています。

(財) 福澤記念育林会が設立されて1年後の1966年 (昭和41年) に、栃木県那須郡那須町大字伊王野の国有林に分収林設定の契約を締結し、林業三田会代表者、育林会役員 (高村象平塾長・川久保孝雄常任理事・照井伊豆体育会主事) 及び山岳部員10名が現地に参集し植樹祭を執り行いました。さらに、1971年 (昭和46年) には、宮城県本吉郡志津川町大字戸倉の山林約53ヘクタールを購入し、同財団は初めて自前の山林を所有することになり、翌年の春には佐藤朔塾長、生田正輝常任理事、伊沢平勝仙台三田会長ほか仙台・石巻三田会員、岸林業三田会長ほか同会員、日本林業経営者協会役員、高村理事長ほか (財) 福澤記念育林会役職員、並びに地元関係者等が参加し、植樹祭が盛大に執り行われました。

この山林はその後、隣接地を買い増し現在では57ヘクタールを超えています。

ここでは、2000年6月 (平成12年) に鳥居泰彦前塾長の呼びかけにより『塾長と「育林体験の旅」』が企画され学生達40名と鳥居泰彦塾長、長島昭常任理事、今回講演を頂いた細田衛士教授、桜本光教授、に加え林業三田会や地元三田会の塾員多数が参加し1泊2日の旅をしたことも記憶に新しいところです。

今秋、(財) 福澤記念育林会はこの森に再び訪れることを計画しています。

40年を迎える (財) 福澤記念 育林会	P1
第3回トークショー 開催	P2
「幼稚園の杜」 体験記	P2
今秋の研修旅行 計画	P3
シュンランは 長寿?	P4
福澤育林友の会 収支決算	P4



2000 年志津川
塾長と育林体験の旅

第3回トークショーを開催



去る5月24日、東京・三田の慶應義塾大学において、第三回「森を愛する人々の集い」が開かれました。今回は、「21世紀の国際社会における環境問題－水土と森の環境経済学－」をテーマに、同大学の細田衛士経済学部長による講演と、元NHKアナウンサーの松田輝雄氏と細田教授との対談が行われました。それでは当日、100名を越す参加者が、熱心に耳を傾けられたお話の内容を簡単にご紹介致しましょう。

経済活動と環境保全の両立性を、経済理論を用いて分析し、循環型経済社会の構築に向けて経済学がいかに貢献できるかを研究している細田教授の講演は、歴史の紐を解くことから始まりました。まず、農耕文化と牧畜のセットによるヨーロッパの森林破壊など、世界の文化の発達と森林の関係についてお話されました。同教授の誠に興味深い余談を聞きながら、各国の過去を振り返ってみると、山、川、海は微妙なバランスを保ちながら、とてもうまく繋がっていたことがよく分かりました。また、同教授は森の水涵養などを換算した表で、森林のサービス価値がいかに膨大であるかということを示し、「森林は豊かなサービスを人間に与えてくれている。にもかかわらず、私たちはその価値を認識していない。森林の多機能を大切にするため、山、川、海の水循環を考え、多くの人間が知恵を出し合って、自然と折り合いをつけていくべき」ことを強調されました。そして最後に、「食物生産には多量の水が必要であり、食物を輸入することは水を輸入することである。したがって、日本は多量の水を輸入していることになる。つまり、日本の水問題は、海外の水問題である。また、海外の問題は私たちの問題なのです」と21世紀の国際社会における環境問題の中心は水問題であり、私たちの身近な問題であることを述べられました。

続いて行われた松田アナウンサーと細田教授の対談は「自然のしくみがよく理解できた」というような域を越え、心に響くものがありました。特に、お二人の「身近な自然を大切にしよう」「ドンキホーテになろう」のお話はとても印象に残りました。例えば、野鳥観察家や樹木医としても有名な松田氏は、生垣を観て感謝する杉並の会を披露され、近くにある自然についてお話されました。また、同氏は、20年前、海をきれいにするために山に木を植え、当時はアホと思われていた蛸職人「ドンキホーテ」のことも語られました。これを受けて、細田教授はご自身の経験を語りながら、「神棚や額縁に飾った自然ではなく、身近な美しさに気付こう」「ドンキホーテのような遊び心が好き。心のゆとりを持とうよ」と述べられるなど、お二人の対談は興味のつきないものでした。



対談の後、ゲストのお二人を交えて和やかなパーティーが開かれました。(財)福澤記念育林会や福澤育林友の会でも「(緑を残すため)ドンキホーテになって相続税改革をやろうよ」「野山に行こうよ」などの声が聞こえたように思います。

「幼稚舎の杜」自然の第一歩を作り出す

4年K組 大川 瑛理子



私は今回初めて「修善寺幼稚舎の杜の植林」に参加した。朝、7時15分に幼稚舎へ集合するので(早いなー、遅れないようにしないと)と思っていたが、当日はとても楽しみだったので、朝、パッチリ目が覚めた。

バスに乗って、ラフォーレ修善寺に行き、お話を聞いてから、山に向かった。植林をする前に、4年前に幼稚舎生が植えた木を見た。その木は2m50cmから3m位のものがあり、自然の中で順調に育っている様子を見て、少し驚いた。そして、いよいよ私たちが植林をする番だ。50cm位の細い苗木を1本ずつ植えていく。穴

の中に木を立てて、土をかけ、木が倒れないように周りをふみならす。私は、(立派な木に育ってね)と思いながら、全部で6本の苗木を植えた。

しいたけのコマ打ちも体験した。これは、前から一度やってみたいと思っていたので、この後、どうやってしいたけに成長していくのかとても興味があった。

今回、初めて植林をして、私は自然の第一歩を作り出すことができ、とてもうれしかった。私たち幼稚園舎生が植えた小さな木が何十年もかかって、一人前の立派な木に育っていけるよう、私は自分の身の回りから自然を守っていかなければと思っている。最後に、今回の植林の会を準備してくださった方々、ありがとうございました。

福沢育林友の会「志津川研修旅行」

(財) 福沢記念育林会では、今年、宮城県志津川町の山林を訪れる計画を立てています。

宮城県はご承知の通り、伊達藩が統治していた地方ですが、古くは藤原氏が勢力を持っており、歴史的に魅力ある街が点在しています。

今回は北上川の水運と共に明治時代に栄え、今もその面影が多く残る「宮城の明治村」登米町を訪れた後、美しい志津川湾に面したホテル観洋で畠山重篤氏から講演を頂く予定です。同氏は牡蠣養殖のかたわら「森は海の恋人」をキャッチフレーズに、気仙沼湾に注ぐ大川上流で植樹運動を始め、子供たちを養殖場に招くなど環境教育を行っている事で有名な方です。

この地の牡蠣は大変美味で、アメリカ西海岸やフランスでも志津川の牡蠣の先祖が活躍中と聞いています。その牡蠣を味わうのも今回の旅のハイライトです。

翌日は(財) 福沢記念育林会活動の原点とも言える山林を訪れて、枝打ちなどを体験して頂き帰途につく予定です。費用などが確定次第ご案内申し上げますが、今から予定に入れておいて頂ければ幸いです。

スケジュール

- 10月30日(土) 9:24 東京駅発「MAX やまびこ 47 号」
 12:01 くりこま高原駅到着
 13:00 登米町「蔵の資料館」にて昼食「宮城の明治村」登米町散策
 16:00 津山町「クラフトショップもくもくハウス」見学
 17:00 ホテル観洋着
 17:30 講演会「森は海の恋人」講師：畠山重篤氏
 18:30 懇親会 [仙台三田会、地元関係者、合同]
- 10月31日(日) 9:30 (財) 福沢記念育林会の山林到着 森林散策・ご希望の方は枝打ち体験等も出来ます。
 14:00 ホテル観洋到着 町内散策 [800 年杉、荒島等]
 16:32 くりこま高原駅発「MAX やまびこ 86 号」
 18:36 東京駅着



栃木県黒羽町「友情資産 25 周年の森」視察

5月8日五月晴れの土曜日、3年前の平成13年5月に卒業25周年を記念して造成された山林を、植樹に参加された皆様と見学してまいりました。植樹した木は順調に成長し、参加者は感慨深げに観察していました。

特に、長島教授が記念植樹した桜は際立って成長がよく「スクスクと育っている」のは驚きました。



5月の黒羽町



植樹地を遠望



長島教授が植えた桜



自分の植えた木は？

シュンランは長寿？

慶應義塾大学経済学部
教授 長沖暁子



シュンランは雑木林に普通に見られるラン科の植物だった。しかし、雑木林が管理されなくなったり、開発のために失われたりした結果、急速に分布が減りつつある。また野草愛好家にも珍重されていて、各地で盗採の影響もあると考えられる（花茎は蘭茶や食用にされ、根はアカギレなどに効く漢方薬でもあるというが、そのための盗採ではなく、観賞用のようだ。）一方、これだけ愛好家が多いにもかかわらず、実は野生での生態は明らかではない。

そのシュンランの群落が日吉の森には存在する。前号で書いたように1988年から私たちはこのシュンラン群落を個体識別し、追いつけている。

調査区域は10m×10mの方形区が6個の計60㎡で、区画によって樹種も異なり、シュンランがほとんどない区画も比較のために含まれている。個体

数は92年がピークで区域全体で約200個体が確認されていた。その後個体数は減少しているが、現在も100個体は有に越えている。

個体数の減少にはだんだん株数が減って枯死ぬケースと、比較的成長の良い個体（その多くは花をつけている）があるとき突然なくなるケースがある。後者は状況から考えて盗採としか考えられない。その個体数は累積で68個体にもなり、この分を差し引くと、ほぼこの群落の個体数は変わらず、盗採がこの群落に大きな影響を与えていることがわかる。

シュンランというと私たちは花が咲いている姿を思い浮かべるが、開花する個体は毎年25～31%しかない。また経年調査によって野生では花をつけるまでにかなりの年数がかかることがわかってきた。すなわち、日吉の森ではかなり成長の良い個体でも年間に平均1株しか増えていない。そして最初に花をつける平均株数は3.5株である（一度開花すると継続して咲く傾向がある）。つまり花をつけるまでに4年は必要だということになる。しかし、株数が4株になったからといって必ず花をつけるわけでもなく、90年～97年に存在し続けていた個体の半数近くは1度も花をつけていない個体だった。

盗採されたと考えられる68個体の平均株数は7.2で、数年かかってやっと花をつけるようになった個体が盗まれていることになる。多分盗む人はこのようなシュンランの経歴には想いははせないのだろう。

日吉の森に恒常的に人の手が入り、人々が関心を持つことで盗採を防ぎ、森から消えた生きものたちも復活する可能性がある。

それにしても調査区域外にある、50株はあろうかという巨大なシュンランは何年生き続けてきたのだろうか？ ひょっとしたら日吉キャンパスの歴史をすべて見てきたのかもしれない。春の日の新たな感慨だ。

育林友の会（平成15年度収支）

		収入	支出	適用	会費の口座振替 予定日について 平成16年度会費の 口座振替予定日は 平成16年9月24日 を予定しています。 宜しくお願い致します
前年度繰越金		2,974,905			
収入	会費収入	2,190,000			
	利息収入	20			
支出	寄付金		2,500,000	（財）福沢記念育林会へ	
	通信費		20,000		
	手数料		30,649	会費引落手数料	
	諸経費		420		
当年度収支		2,190,020	2,551,069		
次年度繰越金		2,613,856			